

原子力災害の経験について話すことの難しさをどのように克服 するのか？

安東 量子^a

^aNPO 法人福島ダイアログ、いわき市田人町、974-0151; e-mail: info@fukushima-dialogue.jp

要旨- 2020年12月に開催された「ICRP 原子力事故後の復興に関する国際会議 セッション 3.4 経験の伝承に関するフォーラム」では、「原子力災害の経験について話すことの難しさをどのように克服するのか？」をテーマとしたパネル・ディスカッションが行われた。ファシリテーターは安東量子（NPO 福島ダイアログ）、パネリストとして、千葉惇氏（福島県立安積高校教員）、青木淑子氏（NPO 富岡町3・11を語る会）、遠藤未来氏（日本大震災・原子力災害伝承館）、志賀賢治氏（前・広島平和記念資料館館長）、Thierry Schneider 氏（CEPN）、高村昇氏（東日本大震災・原子力災害伝承館館長、長崎大学）の6名に参加していただいた。

キーワード: 広島、原子力災害、福島、チェルノブイリ、災害記録

1. 背景

2020年12月に開催された「ICRP 原子力事故後の復興に関する国際会議 セッション 3.4 経験の伝承に関するフォーラム」では、「原子力災害の経験について話すことの難しさをどのように克服するのか？」をテーマとしたパネル・ディスカッションが行われた。パネリストとして、千葉惇氏（福島県立安積高校教員）、青木淑子氏（NPO 富岡町3・11を語る会）、遠藤未来氏（日本大震災・原子力災害伝承館）、志賀賢治氏（前・広島平和記念資料館館長）、Thierry Schneider 氏（CEPN）、高村昇氏（東日本大震災・原子力災害伝承館館長、長崎大学）の6名に参加していただいた。20世紀に開発が始まった原子力技術の発展にともなって、人類は、それまでの歴史上経験することのなかった原子力災害にも直面することとなった。この災害をどのように理解するかは、いまだ共通の認識を持つに至らず、特有の語りにくさを生じさせている。広島、チェルノブイリ、福島の3つの異なる原子力災害に直面したパネリストに、語りにくさをもたらすもの、それを克服するための方法について議論していただいた内容を報告する。

まず、パネリストの関係する原子力災害伝承の施設についてのパネリストによる発表の内容を踏まえつつ、概略を背景として紹介する。

1.1. 節: 広島平和記念資料館

広島平和記念資料館の資料収集は、広島文理科大学地質学者鉱物学教室で教鞭を執っていた長岡省吾が始めたものである^a。1945年8月6日の原爆投下から2日後、広島文理科大学のある広島市内に入り、市内の花崗岩の熱線による変化に気付いた長岡は、この爆弾が通常のものとは違うことに気付き、被爆資料の収集を始める。個人的な被爆資料の収集だったが、広島文理科大学を退職後1948年、長岡は資料調査を行う専門職として広島市役所に採用され、このとき、個人所有していた資料も広島市所蔵となった。1949年、それらの資料を基に、「原爆参考資料陳列室」が設置された。1955年、広島平和記念資料館が開館し、長岡が初代館長となる。当時の展示内容は、被爆資料とともに原子力の平和利用にかんする展示物も含まれていた。1975年、大規模改修が行われ、展示内容も一新、原子力の平和利用にかんする展示は撤去された。1991年、二度目の大改修を行う。2019年、三度目の大規模改修が行われた。

1.2. 節: ベラルーシ ブラギン博物館

チェルノブイリ事故後のベラルーシ、ブラギン地区では、2004年から2008年にかけて実施されたEUのチェルノブイリ被災地支援プロジェクトCOREプログラムの一環として、チェルノブイリ原発事故の記憶を伝えるブラギン博物館の展示改装がおこなわれた。改装後の展示は、4つのセクションに分かれる。

- 1：30 km 立入禁止区域出身の画家の作品展示、
- 2：30 km 立入禁止区域の品々の展示、
- 3：事故の犠牲となったブラギンの若い消防士追悼、
- 4：企画展「The Lost Land」。

とりわけ、企画展「The Lost Land」については、地元ブラギン地区の6つのグループからなる成人有志とアーティスト、専門学芸員の協働作業の成果となった。住民有志は、企画展の準備の過程で自らが目撃し、経験したことについて語り合い、苦難だけでなく故郷の美しさや住み続けたい願いを表明する機会となった。展示品は、住民有志グループが収集したものである。この過程で、住民たちは共通の言葉を生み出し、事故と経験した状況について語る新しい手段となった。また、これは事故によって切断された被災地の過去と現在をつなぎ直す作業ともなった。

1.3. 節：東日本大震災・原子力災害伝承館

東日本大震災・原子力災害伝承館は、2019年9月、世界にまれにみる複合災害となった東日本大震災と原子力災害の記憶と復興の過程を記録し発信することに

^a 志賀賢治『広島平和記念資料館は問いかける』岩波書店、2021

よって風化を防ぐことを目的として、原子力災害被災地である福島県双葉町に建設、開館された。その基本理念は、以下の三つとなっている。(1) 原子力災害と復興の記録や教訓の「未来への継承・世界との共有」、(2) 福島にしかない原子力災害の経験や教訓を生かす「防災・減災」、(3) 福島に心を寄せる人々や団体と連携し、地域コミュニティや文化・伝統の再生、復興を担う人材の育成等による「復興の加速化への寄与」。展示内容は、6つのブースからなっており、発災からの時系列に従って展示内容が構成されている。館内では、震災経験者(語り部)による証言を聞くことも可能となっている。

2. パネル・ディスカッションでの議論

パネル・ディスカッションは、司会の用意したふたつの質問にパネリストに順に答えてもらう形で進行を行った。以下、質問に対するパネリストの回答の要旨を紹介する。

2.1.: 質問1、あなたは原子力災害の経験について語りにくいと感じたことはありますか？ あるとしたら、それはどういう時ですか？ また、それはなぜだと思いますか？

千葉氏は、福島県内の教員として、生徒に対する放射線教育や被災地研修といった活動を行っている。2019年に千葉氏が行った福島県内外の高校生を対象に行ったアンケート結果からは、放射線の知識全般が低く、放射線に関して「教える」文化そのものが育っていないことが推察された。また、震災に対する理解も、福島県内でコメの放射能検査の結果を知らない、福島県内で避難指示が出た面積を50%と答えるといった震災規模そのものが次の世代に伝えられていない様子も窺えた。原子力災害について語る難しさは、2011年の事故直後には、授業で扱うにはあまりにデリケートであり、データや教材の用意もできていなかったため、大きな苦労をした。現在は、データも出そろい、教材が用意できたこともあり、対応できるようになってきている。千葉氏からみた、生徒が原子力災害について語ることの困難については、3点考えられる。1) 根本的な知識がないこと。現在の高校生は、小中学生の頃に震災を経験しているため、当時の経験についての情報が乏しく、大人がうまく伝え切れていない。2) 経験の重さから話しづらい。郡山市内の安積高校でも、避難経験のある生徒がいるが、異なる体験をしている生徒同士で会話をしづらい状況が窺われる。一方で、震災という経験の重要性への認識はされており、千葉氏が震災に関する授業をした後、語り合う時間を取る際には、多くの意見があげられるという。3) 大人も含めて、震災の教訓をまとめられていない。現在の福島県内の状況は、いまだ複雑ではあるものの、わかりやすい形でまとめられていないため、語りにくい状況になるのではないかと。

2013年から富岡町で震災の経験を語り伝える活動をしている青木氏が語りにくさを感じる理由は、原子力災害の被害が目に見えないからである。同じ福島県内であっても、被災の状況が共有されておらず、被災地となった双葉郡についての偏見が生まれている状況が危惧される。宮城岩手といった津波による物理的な被害を受けた被災地に比べて、福島県内の原子力被災地の被害の様子を説明することが非常に難しい。原子力災害については、しばしば医療者や物理学者によって語られる放射線の健康リスクよりも、長期にわたって、人が住めなくなるといった社会的条件の変化によって、じわじわと人生を根こそぎ変えてしまうおそろしさがあるが、それがわかってもらいたい。

2019年4月から東日本大震災・原子力災害伝承館に勤務している遠藤氏は、震災当時いわき市に在住する小学校三年生であった。2週間ほどの避難の後、自宅に帰宅した。高校進学にあたって、双葉郡広野町に開設されたふたば未来学園高校を選択し、学習活動として原子力災害について学習することとなった。伝承館への就職にあたっては、責任の重さを痛感すると同時に、原子力災害の避難区域などの直接の被災者ではない自分に職員としての仕事が勤まるのかといった葛藤もあった。伝承館ではさまざまな人の話を聞き、また資料を見て多くを学んでいる。一方、少ない知識しかない自分が語ってもよいのかという葛藤は常にある。また取材を受ける機会も増え、震災の避難当時のことを思いだし苦しくなることもあるが、自分の経験を語ることも重要であると思っている。

広島平和記念資料館前館長である志賀氏は、広島の被爆経験に置き換えての回答がなされた。被爆直後の被爆者も自分自身の経験を語りたがらなかったという証言がある。ある時期から「語り部」が登場するが、そのためには乗り越えなくてはならない障害、ないしは時間が必要とされたのではないか。現在は、修学旅行生を中心に体験を語り伝えることが行われているがどこまで伝え切れているかの不安は大きい一方、広島では被爆経験が溢れるように伝えられる反面、コミュニケーションが一方通行になっている懸念もある。それは「共通の言葉」をつくることができていないことを意味し、一方通行の語りの洪水の中で、耳を塞ぐ人もでてきていることが懸念される。語りにくさの原因としては、原爆の災害があまりに巨大すぎ、語り手には理解されないという諦めがあり、聞く側には非当事者という引け目を感じるという状況がある。原子力災害は、経験者と非経験者との間に「溝」を作ってしまうのではないかと感じる。

チェルノブイリ事故後のベラルーシでの支援経験をもつシュナイダー氏は、事故後の福島復興支援も行った観点から二つの難しさが語られた。最初の難しさは、専門家と住民との距離感であり、1990年代にベラルーシの被災地を訪れたときに感じた。その距離を克服するために、専門家は段階的に行動しなくてはならない、そして、住民の声に耳を傾ける重要性を感じた。科学的な視点も重要である一方、住民にとっては、日常生活の回復が重要である。科学的な知見を生かしつつ、放射線防護を現実にあわせていく戦略的なアプローチが重要である。またもうひとつの難しさは、放射線防護の専門家コミュニティ内部で、被災地での経験を伝えることであ

った。福島在住の二人のパネリストから、生活が大きく変わったという話があったが、そこからすべてははじまっているにもかかわらず、人びとの日常生活になにが起きているのかを専門家世界で伝えることは困難を伴うことが多い。現在、放射線防護にあたっては、ステークホルダーの関与を重視しており、記憶の伝承にあたっては、現地の人たちの言葉を聞きながら、現実をみていくことが重要であると考えている。

高村氏からは、原子力災害伝承館館長であると同時に、放射線被曝と健康影響の専門家として、福島第一原発事故直後から住民とのコミュニケーションに携わった経験が語られた。説明することの困難さの最大の原因は、放射能が五感で感知することができないからである。また、その一方で、測定器械さえあれば平易に数値として確認することはできたが、その数値の意味を説明する人も当初はいなかった。そこが大きな混乱を生む原因になったのではないかと考えている。機械が多く出回って、測定する人も増えたが、その際にも、専門家としてその数値の意味を説明することを心がけてきた。

2.2: 質問2、他の方の回答を聞いて、語りにくさを乗り越えるためには何が必要なのか、どうすればいいと思いますか？

千葉氏は、一巡目の回答に出てきた「溝」を乗り越えることの重要性を指摘した。そのために重要なのは3点。1点目は、教育である。被災地に足を運び、偏見を取り除き、復興に向けての努力を知るなど、まず県内で理解を広げることが重要である。それは県外に広がる。現在、福島県内における現地研修の機運は盛り上がっていない。2点目、放射線のみならず東日本大震災と原子力災害全体について知ること、それについて語り合うこと。生徒たちは、語りたいことが多く持っており、語り合う機会が大切である。3点目、大人がまず知ること。伝承館ができたのを好機とし、「放射線防護文化」を作るべきではないか。

青木氏は、乗り越えるためには想像力がなにより必要であると述べた。福島県や双葉郡に起きたことは、一地方に起きたローカルなことではなく、世界のどこにでも起こりうることだとの想像力を働かせて教訓にしてほしい。富岡町は震災後激減した人口でこれからの街を作っていかななくてはならない。1人でも多く、自分たちの課題として考えてくれる人を増やしたい、それが語りにくさを乗り越えるために必要な信念だと思っている。

遠藤氏は、知識を高める必要性が重要だと語った。個々のエピソードを聞くこともその手段のひとつであると思っている。原子力災害伝承館では、語り部の経験談によって、震災当時の人たちがなにを思いながら行動していたことを知ることができる。また、復興に向かう福島県の姿をリアルタイムで知ることもできる。こうしたことを知ることによって、震災を自分ごととして学ぶことを積み重ねて、語りにくさは徐々になくなっていくのではないかと思う。

志賀氏は、青木氏が先に指摘した「想像力」は原爆資料館の展示でも重要なキーワードになっていると述べた。想像力をかき立てるために、問いかける内容の展示に変えたが、「溝」を乗り越えることが必要となった。平和記念資料館でも、語り部が被爆経験を語っているが。対象は小中学生の修学旅行生が多い。被爆経験者が自分たちと同じ世代の時に被爆したという状況は、共通の言語を持っているのではないかと感じる、独特の雰囲気を感じることもある。もう一点、固有名を出すことによって、学生の反応が非常に印象的なことがあった。原爆の被害はとかく数字で語られがちであり、また、広島で育てば、資料館に何度も訪れ、被爆経験も聞かされることになる。その学生も、最初は志賀氏の講義にも同様の想いを持っていたが、途中で印象が変わったという。その時に話したのは、8月6日の夜、大火傷を負いながら男の子を産み落とし、絶命した18歳の初産の女性のエピソードだった。お産を手伝った助産婦も被爆で大火傷を負っていた。お産に使われた道具を見せながら話をしたが、そこに女性の名前も書かれていた。それを見たときに、学生は、これまでは遠い歴史、過去の話だと思っていたが、そこにその名を持つ1人の人間が存在し、そして子供を産み落としたのだと実感した、と書いていた。学生が「個人」を意識したのは名前を見て、その時初めて、自分に連なる1人の人間の身に起きた出来事であると感じることができたのではないかと。

シュナイダー氏は、事故から10年が経ち、記憶の伝承は今が重要な時期である。記憶の伝承には、客観性が重要であるが、それは歴史を語るだけではなく、未来へ向かうことでもある。そのためには、協働関係を構築することが重要である。それは、対話を促すものでもある。科学についてのみではなく、日常生活についての対話を行うことも、大切な要素となる。また、次に起こる災害に向けての教訓を引き出すことも重要となる。

高村氏は、未来のために過去を学ぶことの重要性を指摘した。福島事故の前にあったチェルノブイリ事故から何を学んだのかも問い直されるべきではないか。過去から学び、学んだことを知識として取り入れる教育を充実させることが重要である。

3. まとめ

本議論では、原子力災害では語ることにについて、いくつもの「溝」が生じることが証言された。その「溝」は、事故が起きてすぐの時期では、専門家と一般人の間の、放射能についてのリスク認識の溝としてあらわれる。やがて、時間の経過とともに、放射能のリスク認識のみにとどまらず、新たに、当事者と非当事者、世代、専門家コミュニティ内部など、複層的に「溝」が生じる。これは、原子力災害が、極めて稀な災害であるため同じ経験をした人が少なく、想像することさえ簡単ではない事が大きな原因となっている。同時に、その被害が大きすぎ、あるいは目に見えないために、統計的数値としてあらわされる事が多く、実感を伴いにくいことも背景にあると考えられる。とりわけ、専門家コミュニティにおいても、被災地の状況については、被災地を実際に経験している専門家とそうでない専門家の間に、伝

達の溝が生じていることを考慮すると、知識の多寡の問題というよりも、むしろ、被災経験、もしくは、被災地での経験の存否が、溝の大きな要因となっていると考えられる。さらに、広島原爆被害の伝承においても、当事者と非当事者の溝は埋められていないことから、時間の経過とともにこの溝が自然に解消するものではないことも窺える。

この溝を解消するためには「協働」、すなわち経験を共にする事が非常に重要となる。経験のある／なしが、重要な要因となっている以上、シンプルに考えれば、経験を共にする事がもっとも効果的な溝の解消方法となる。それができない場合は、継続的に言葉によって経験を語り会い、「共通の言葉」を見つける事が重要となる。一方、言葉だけによる伝達には、それによって伝えられる事柄はそう多くはないことから、おのずと限界がある。また、経験していないことを伝え、理解するためには、想像力が何より重要な要素となるが、想像力を働かせるには、共感が必須となる。なぜならば、共感できないことに対して、想像を働かせることはほとんど不可能であるからだ。

ここで、広島の被爆経験伝承において、共感を惹起する大きな駆動力となったのが「固有名」だったという志賀氏の指摘は非常に興味深い。この場合の「固有名」が意味するのは、その時その出来事（原爆）を経験したのは、不特定多数の匿名の誰かではなく、取り替えの効かないただひとりの人間であったという事実である。そこに生きていた個人の姿を見いだすことによって、情報の受け手にとってはぼんやりと感受されるに過ぎなかった歴史的な出来事が、今現在の自分とひとつながりの生きた出来事として実感する事ができるようになったのだ。さらに言えば、このことはすなわち、固有名を通じて、個々の人生や存在のかけがえのなさを見出したと言える。簡単に言えば、そこにかけがえのないひとりの人生があった、という当たり前と言えれば当たりの事実であるが、それは、そのまま、普遍的な価値である「人間の尊厳」を見出したと言い換える事が可能だろう。固有名という個別的な事象のなかに普遍的な価値を見いだす事が、未知の出来事を自分に繋がる経験として引き受けることを可能としたのだ。ここに、経験を伝承し、共有することの核心があると言えるのではないだろうか。本議論で明らかになったのは、経験の伝承を行うにあたって、普遍的価値を見出すことの重要性であったことを指摘して、本稿の結論としたい。